

**平成 28 年度第 4 回 京都市市民参加推進フォーラム**  
**分析第 2 部会 摘録**

■分析対象事業

京都市景観市民会議

■出席者（市民参加推進フォーラム委員 分析第 2 部会委員 3 名）

荒木泰子，太田清美，壬生裕子

【議事内容】

<壬生委員>

前回のヒアリングとその後の議論が，資料 1－2 にまとまっている。事業概要の説明のボリュームや，分析結果についてポイントの順番はこれでいいのかということ等について，御覧になってどのような感想を持たれているか，お聞きし，議論をしたい。

**資料全体に関係する発言**

---

（記載される言葉の表現や内容の並び順について）

<壬生委員>

ポイントは 3 つということで，分かりやすい。また，流れに沿ったポイントの順番となっているが，これもこのままが分かりやすい。

表現の仕方などは，検討の余地があるかもしれないと思いつつ見ていた。

<太田委員>

私たちのような市民が読むためには，「資料 1－3」は，読み手がここに食いついていけるか，ということを考えて，表現にはこだわったほうが良い。「資料 1－2」については，役所の方が読むためのものだとのことであるので，あまり簡略化をしすぎると，役所の職員にはかえって頼りないのかなと思ったりもする。

<壬生委員>

職員向けには，少し言葉は固くなっても正確な情報を記載したい。「資料 1－2」では，誤解が無いように，きっちり書いてもらった。

ただ，たとえば「資料 1－2」のポイントについて，この部分を，そのまま「資料 1－3」に持っていくのは，つらいと感じる。特に，「みっけ隊」の方はまだ分かりやすいのだが，「景観市民会議」では，言葉も難しい。このポイントだけ読んで，内容に納得できるかと言うと，わたしでもつらいという感じはする。

<太田委員>

「資料1-2」で作成された文章がそのまま「資料1-3」で使われるのか。

<事務局>

「資料1-2」は、役所の内部向けに具体的に書き入れたいが、「資料1-3」は、市民にちょっとでも関心を持ってもらえるように、写真や吹き出しを使って、文字数は相当減らして、コンパクトにしたい。内容について、この場で絞った議論をしていただければ、それを受けた資料を作ることが出来る。

### 「ポイント1」(資料9ページ)について

<壬生委員>

ポイント1では、わざわざ市民の声を直接聞くという制度設計をしなくても良かったものを、とても前向きに取り組んでいただいたということが、評価できる。だから、この点はぜひポイントとして挙げたい。ただ、記載されている表現が固く、気になる。

例えば、「事業形成をする段階」という表現などが、柔らかく、とっつきやすい言葉にならないか。「検証システム」が2回出てくるのはくどい。1つの文章にまとめることが出来る。大事なのは、この後半部分の、「検証システムの中に市民の声を取り入れる」ことを自ら決めて、実施したという事である。この点を、ぜひプラスとして評価をしたい。

<太田委員>

後半部分に来ている内容こそ、インパクトがあるような書き方にしたい。このままでは、最後まで読まないとわからず、「そういうことがあったのか」と流れてしまう。結論ありきの論のたて方をしたい。

<荒木委員>

それが良い。ここでも、一応「制度設計をした」と、結論ありきの書き方をしている。2度目の「検証システムの中に」の文言は不要で、制度設計のところをもう少し柔らかい表現で膨らまして書ければよい。

<太田委員>

景観政策で初めての試みとしてこのようなシステムを取り入れたということがまず冒頭に来て、その理由として、景観政策についての説明なりが1行ぐらいで入ると、ポイントとして評価したい点がわかりやすくなる。

<壬生委員>

ポイント1の文章の最後の「景観市民会議を例として、あらゆる所属に広がることを期待する。」と書かれた部分について事務局に聞きたい。この「所属」という言葉遣いは、一般的な遣い方なのか。

<事務局>

役所の中では、このように使っている。役所の中では、わかる。

<壬生委員>

役所で通じるという事であれば「資料1-2」はこのままでかまわないかもしれないが、役所の独特な言い回しであるという事に留意し、「資料1-3」に持ってくる時には、「部署」など他の表現にした方がいい。

## 「ポイント2」(資料9ページ) について

<荒木委員>

「参加の負担の軽さ」という表現については、「気軽に参加できる企画」という表現にできる。

<壬生委員>

「気軽に参加できる企画」という表現に変えると、その後の「カジュアルに参加できる」という文と重なってくるので、ここをどうにかしたい。

前回のヒアリングで、「景観市民会議」ではリピーターが増えているという内容だったかと思う。経年でどのくらいの人数が増えているかということを数値で入れ込みたい。

<太田委員>

前回、景観だけを仕事としたプロフェッショナルな話ではなく、いろんな見方が出来る顔ぶれの専門家を呼んで、時事的な社会課題をテーマとして「ここに行けば面白い話が聴ける」と感じさせることができたからこそ、市民に向けて効果的に周知でき、興味をもってもらえたという議論があった。ポイント2には、そこを主題に持ってきた方がいい。

私は、前は、役所のこういったシンポジウムなどは、固くて眠くなるだけだというイメージがあった。しかし、「景観市民会議」のことを聞いて、面白そうだし行ってみたいと思った。このことこそ、ここで強調すべきポイントである。

## 「ポイント3」(資料10ページ) について

<事務局>

ここでの評価は、25年度の景観市民会議が、地域で活躍するグループ同士のネットワークを作ったという事に対するものだったが、景観市民会議に限った評価として書きだそ

うとすると、そういった意図は行政にも市民グループにも無かったという答えしか出てこない。しかし、25年度の会議が、ネットワークのきっかけとなる出会いだったという事は、間違いがない。「京都景観フォーラム」の方にお聞きしたところ、景観政策課は、常に、ネットワークづくりを意識した事業を展開しているという意見をいただいた。行政指導的になりがちな「景観政策」という分野で、市民の活動が実際に活発化し広がっていることについて、京都市が進めていることだと評価をすべきとの意見であった。特に、市民と行政とのネットワークについては、人脈を頼りとすることになる。行政では、定期的に人事異動があるため、人脈は不安定なものにならざるを得ない。だからこそ、ネットワークづくりこそ仕事なのだと認識して動いてくれる行政職員が増えてほしい、ということだった。

<太田委員>

京都は、人材も多いし、魅力的な要素がたくさんあるという、潜在的な強みがある。出会うきっかけがあれば、新たな発想が出て、良いものが出来る要素がある。それをツールとしてもっと利用すべきだと考えている。新しいモン好きだし、プライドも高く、声をかけて場所ときっかけさえあれば「私もやりたい」「自分たちも参加したい」と言う人はいて、実際に行動する。だから、ネットワークづくりをひろげていくような呼びかけが出来たらよい。

<壬生委員>

この資料の中では、「つながりの創出に寄与している」というところで終わってしまっている点が気になる。

<荒木委員>

市民の「自主的な」「主体的な」参加だという点が重要である。

<太田委員>

それが、努力の結果として続いて広がっているという事をアピールしたい。

<荒木委員>

ポイント2で挙げた、気軽に参加できるところから、ポイント3に繋がって広がって、自主的に参加して深まり、それが継続している。

<壬生委員>

会議に参加した市民が交流することで、次の自主的な活動に繋げるような工夫がされているということまでを、ここで言えるかどうかは難しいかもしれないが、それが大事なことだという言い方はできる。

<太田委員>

ここで話題提供者となる人を選定して託した時点で、市民が興味を持つような工夫はできている。そういうきっかけがあったので、ネットワークが出来たのではないか。他部署でも、その感性をこそ真似てほしい。

<壬生委員>

行政の方は謙虚なので、工夫はしてないとか、改善はできていませんと言いがちなのだが、発想がいいのは間違いないのだから、フォーラムから「工夫が出来ている」と言ってしまってもいいのではないか。

<事務局>

景観フォーラムの方も、京都市職員が、市民の取組について、「市民が自主的にやっていることです」と切り離すのではなく、行政として後押しをしていることをもっと自覚して、仕事として認識してもらえると嬉しいとおっしゃっていた。

<壬生委員>

その点は、公務員としての立場から言いにくい面もあるのかと思うので、このフォーラムのような外部機関が評価をすることで、後押しをしたい。

## 「その他」(資料10ページ)について

(市民意見を取り入れる仕組みづくりについて)

<壬生委員>

「その他」は、「課題」なのかと思う。

まず、年に1度の会議という事については、市会から求められていた検証システムの構築という意味で、景観市民会議が有効に活用できているのかどうか、と言う課題がある。

<太田委員>

1年に1度の会議では、「検証している」とは言い難い。しかしながら、「景観市民会議」に参加した市民が、ここで派生したネットワーク等で、それぞれ、1年間活動をして、意見を持ち、また次の年度に集まって話し合うというフィードバックとなり、景観政策についての考えが全体で成熟していけば良い。広い意味でのPDCAサイクルとなる。そのような記述にすることで、この分析が具体的なものとなり、まとまりが出る。

(景観市民白書について)

<壬生委員>

「景観市民会議」の分析が今回の目的であり、「景観白書」は話の流れで出てきたものだったので、ここでどのように扱うかを考えたい。

<太田委員>

前回、景観白書は見やすく、画期的な内容で、良いという議論だった。他部署でも、このようなものを作成できたらいいという意味で、ぜひ載せたい。

<壬生委員>

事業概要の最後の部分、8ページの、「その他の事業」は、他のものも含め、消すか外すことになる。景観白書は、「資料1-2」で、コラムのように別物として独立させて記載してはどうか。「資料1-3」で取り上げると、唐突な内容になるので、こちらには載せる必要はない。

#### 資料全体に関する発言

---

(周知について)

<荒木委員>

この資料を、がんばって検討して、どんな市民が見てくれるのか、どのように活用されるのかという事が気になっている。

<壬生委員>

そのことについては、課題だと認識している。ただ、京都市の市民参加の状況について、分析し、皆さんに分りやすいように伝えるというフォーラムの使命もあり、それをどのように形にするかという、ことで、今年度は試にこの方法をやってみようという事になった。やり方などについては、今後、議論が出来ればありがたい。

(ネーミングについて)

<荒木委員>

事業等のネーミングについては、漢字をつなげると、きちんと意味が伝わると思うが、読みづらくなる。

<荒木委員>

「みっけ隊アプリ」は何となく、漢字が少なく、とっつきやすい印象がある。そのようなネーミングについても、感性を磨くことは大事だ。